



旧幡豆地区内陸用地の活用提案募集を、市民の言葉で考える

## 143ヘクタールの問い。 西幡豆の山は、 誰の未来になるのか

愛知県西尾市の西幡豆の山で、大きな話が動き出しています。愛知県企業庁が管理してきた「旧幡豆地区内陸用地」について、愛知県が土地利活用の提案募集を始めました。

143.5ha

対象地の面積

約133.9ha

山林面積

2026.6.1-  
8.31

募集期間

資格不問

個人・法人・団体

## 143ヘクタールの問い。 西幡豆の山は、 誰の未来になるのか

旧幡豆地区内陸用地の活用提案募集を、  
市民の言葉で考える

西尾ミライ新聞

見出し画像: 西尾ミライ新聞「143ヘクタールの問い」。

場所は西尾市西幡豆町地内。面積は143.5ヘクタール。そのうち約133.9ヘクタールが山林です。募集期間は2026年6月1日から8月31日までで、応募資格は問わず、個人でも法人でも団体でも提案できます。

この土地は、もともと中部国際空港の建設に必要な埋立用土砂を採取し、その跡地を工業用地等として開発する目的で、1999年に愛知県企業庁が購入した土地です。しかし、2001年1月に土砂採取事業は中止され、それ以降、県企業庁が管理してきました。

つまり、これは「突然出てきた空き地の活用話」ではありません。空港建設、土砂採取、事業中止、25年近い管理、過去の利活用構想、そして今回の提案募集。その長い経緯の上にある、幡豆の未来に関わる問いです。

一方で、地域ではすでに期待と不安の両方の声が出ています。二人の西尾市議の意見を見てみましょう。

渡辺議員のSNS投稿では、今回の提案募集を「25年を経て大きく動き出した」機会として捉え、自然・地域資源・観光・交流など、幡豆の新たな可能性につながる提案への期待が示されています。また、住民説明会に参加したうえで、地

域の声を届けながら、次の世代に誇れる財産となるよう考えていきたいという趣旨の発信もされています。

一方、神田議員のSNS投稿では、この件を新聞報道で初めて知ったこと、説明会の開催を知らされていなかったこと、県がどのような方向性でこの土地を活用しようとしているのかが見えにくいことへの問題提起がなされています。また、住民から寄せられている外資系企業への売却、工場誘致、太陽光発電施設、産業廃棄物処理施設などへの不安にも触れながら、「何をつくるか」より前に、「誰が、誰のために、どのような考えで活用しようとしているのか」を説明する必要があると述べています。



つまり、この土地をめぐるのは、地域活性化の大きな機会として期待する見方と、情報共有や住民参加のプロセスを丁寧にすべきだという見方の両方があります。どちらか一方を切り捨てるのではなく、期待と不安の両方を並べたうえで、市民が自分の言葉で考えられる状態をつくるのが大切だと思います。

西尾ミライ新聞は、この土地活用について、いまの時点で「賛成」か「反対」かを決める新聞ではありません。むしろ大事なのは、決める前に、ちゃんと知ることだと思っています。

この土地がどういう経緯で県有地になったのか。なぜ25年近く動かなかったのか。どこまで開発できて、どこは守るべきなのか。誰が使い、誰が管理し、誰にとっての未来になるのか。そうした問いを、市民の言葉で整理することから始めたいのです。

この問題は、単なる「山の開発問題」ではありません。幡豆の自然、名鉄西尾蒲郡線、こどもの国、三ヶ根山、海辺の観光、地域の暮らし、子どもたちの未来、そして人口減少時代のまちのあり方が、すべて重なっています。

## 1 公式情報の整理

まずは、現時点で確認できる公式情報を整理します。

対象地は、旧幡豆地区内陸用地。場所は西尾市西幡豆町地内。面積は143.5ヘクタールで、そのうち約133.9ヘクタールが山林です。土地利用は市街化調整区域で、保安林が点在しています。標高は20メートルから200メートル。

小野谷という小野小町の妹、小野小桜のふるさととして知られています。海からすぐのところこんな里山があるんだ、と私（発行人 藤野貴教）も驚きました。

三ヶ根山への登山口にも通じており、水が湧出する場所です。この水で育ったお米で、幡豆町の日本酒「尊皇」は作られています。いわゆるひとつの、かなりの山の中なのです。

アクセスは、名鉄蒲郡線の西幡豆駅から北へ約1キロ、名豊道路の幸田桐山ICから約5キロです。もともとは1999年に、中部国際空港（セントレア）建設に必要な埋立用土砂を採取し、その跡地を工業用地等として開発する目的で愛知県企業庁が購入した土地です。

しかし2000年12月に中部国際空港側が土砂調達を民間から行うと表明し、2001年1月に県企業庁が土砂採取事業を中止。以降、県企業庁が管理してきた土地です。

その後、2001～2003年ごろに土地利用の検討が行われ、住民約3,000人へのアンケート・ヒアリング・アイデア募集、学識経験者や地元有識者による委員会検討が行われています。

2003年には「採石場跡地」と「圃場整備跡地」を利活用すべき範囲、その他の山地を保全すべき範囲とし、ふれあい・スポーツの森／福祉の郷／エコタウンという3案が検討されました。ただし、2004年には法規制・企業動向・事業採算性などの面から、当時の構想を具体化するのには極めて困難と判断されています。

今回の募集は、2026年6月1日から8月31日まで。応募資格は問わず、個人・法人を含めて提案可能です。提案書には「地域活性化につながるポイント」と「土地の特性、公益性、実現可能性を考慮した計画案」を書く形になっており、例として「名鉄西尾・蒲郡線の利用者増」も挙げられています。



位置図。出典: 国土地理院発行地形図を含む愛知県資料。



西幡豆駅から北へ約1km、幸田桐山ICから約5km。



現地の看板。「自然をたいせつに」という言葉を紙面の芯に置く。



## 2 この問題の本質

この問題は、単に「山を開発するのか、守るのか」という二択ではありません。むしろ、いくつもの論点が重なっているところに難しさがあります。

一つ目は、25年近く具体的な活用に至ってこなかった県有地を、これからどう位置づけ直すのかという行政資産の問題です。もともとは中部国際空港の建設に必要な埋立用土砂を採取し、その跡地を工業用地等として開発する目的で購入された土地でした。しかし、土砂採取事業は中止され、その後、県企業庁が管理してきました。今回の募集は、その土地を改めて地域の未来につなげられるかどうかを問うものでもあります。

二つ目は、土地そのものの制約です。対象地は143.5ヘクタールありますが、そのうち約133.9ヘクタール、つまり約93.3%が山林です。用途地域は市街化調整区域であり、保安林も点在しています。したがって、普通の造成地や空き地のように、自由に何でもつくれる場所ではありません。法規制、自然環境、採算性、アクセス、維持管理を含めて、何が現実的なのかを見極める必要があります。

三つ目は、名鉄蒲郡線や西幡豆駅、そして幡豆地域の将来像とどう接続するかという交通・地域戦略の問題です。この土地は西幡豆駅から北へ約1キロの位置にあります。車で行く山の施設として考えるのか、駅から歩いて行ける場所として考えるのかで、土地活用の意味は大きく変わります。名鉄西尾・蒲郡線の今後を考えるうえでも、この土地が沿線の価値や回遊性につながるのかどうかは重要な視点です。

四つ目は、誰が、誰のために、どのようなプロセスで決めるのかという住民自治の問題です。どんなに魅力的な提案であっても、地域の人たちが十分に知らないまま進んでしまえば、不信感が残ります。逆に、地域の声を丁寧に拾いながら進めることができれば、この土地は単なる県有地ではなく、幡豆の未来を市民が考えるきっかけにもなります。

つまり、この問題には、地域活性化の機会、土地利用の制約、交通との接続、住民参加のプロセスという複数の論点があります。どれか一つだけを見て判断すると、議論がずれてしまいます。

### この問題には、大きく4つの論点がある

西幡豆・旧幡豆地区内陸用地の利活用を考えるための整理

**1 行政資産の問題**  
**誰のために、誰が使うのか？**

- 25年近く具体化してこなかった県有地
- 県有地の位置づけ
- 地域の未来につなげられるか

**2 土地そのものの制約**  
**不便な土地で、何ができるのか？**

- 山林が大半
- 市街化調整区域
- 保安林
- 法規制・採算性・アクセス

**3 交通・地域戦略の問題**  
**駅から歩ける未来につながるか？**

- 名鉄蒲郡線
- 西幡豆駅から約1km
- 回遊性
- 沿線価値

**4 住民自治の問題**  
**誰が、どう決めるのか？**

- 住民参加
- 情報共有
- 説明のプロセス
- 納得感

開発か保全かの二択ではなく、4つの論点を分けて考える必要がある。

### 開発か保全かの二択ではない

行政資産、土地制約、交通・地域戦略、住民自治。4つの論点を分けて考えることから始める。

## 3 最大の論点は「何をつくるか」ではない

この土地の活用を考えるとき、つい「何をつくるか」から話を始めたくなります。スポーツ施設がよいのか、福祉施設がよいのか、キャンプ場がよいのか、企業誘致がよいのか。そうしたアイデアを出すこと自体は大切です。

ただ、今回については、その前に考えるべきことがあります。それは、「誰が、誰のために、どのような考えで、この土地を活用しようとしているのか」という問い

です。ここが抜けたまま施設名だけを並べると、過去の構想の焼き直しになってしまう可能性があります。

実際に、土砂採取事業が中止された後、2001年以降に土地利用の検討が行われています。住民約3,000人へのアンケート、ヒアリング、アイデア募集が行われ、学識経験者や地元有識者を含む委員会でも検討されました。その結果、2003年に

は「ふれあい・スポーツの森」「福祉の郷」「エコタウン」という3つの展開案が示されています。

しかし、2004年には、法規制、企業動向、事業採算性などの面から、当時の構想を踏まえた開発は極めて困難と判断されています。また、2011年以降も企業庁でさまざまな事業可能性が検討されてきたものの、事業採算性、土地の制約、アクセスなどの課題が多く、現時点まで具体化には至っていません。

### まず整理したい、3つの問い

旧幡豆地区内陸用地の利活用を考える前に

#### 1 県はどう扱うのか

これは、**決定した計画**なのか？

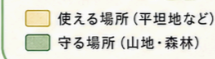
- 売却か、貸付か、公共的活用か
- 最終スキームはまだ明示されていない
- 提案は必ず採用されるわけではない
- いまは「検討材料を集める段階」



#### 2 どこまで使えるのか

143.5haすべてを**開発**できるのか？

- 採石場跡地と圃場整備跡地が中心
- それ以外の山地は保全範囲
- 「使える場所」と「守る場所」を分ける
- 全面開発で考えるのは危険



#### 3 名鉄とどうつなぐか

駅から歩ける**未来**になるか？

- 名鉄西尾・蒲郡線の存続方針
- 西幡豆駅から約1km
- 車だけでなく歩いて行ける視点
- 海・こどもの国・三ヶ根山との回遊



大事なのは、いきなり理想案を出すのではなく、まず前提条件を整理すること。

### 4 住民側がいま確認すべきこと

ここからが、本当の意味での調査と対話の入口です。住民側がいま確認すべきことは、「賛成か反対か」ではなく、まず前提条件です。前提が曖昧なままでは、期待も不安も空中戦になってしまいます。

一つ目は、今回の募集の位置づけです。これは、具体的な事業者を選ぶための公募なのか。地域から広くアイデアを集めるための提案募集なのか。あるいは、将来の売却や貸付、県・市・民間の連携事業に向けた前段階なのか。公式には応募資格を問わない提案募集とされていますが、提案がそのまま採用されるわけではありません。まず、この募集が今後の意思決定の中でどのような意味を持つのかを確認する必要があります。

二つ目は、判断基準です。提案にあたっては、地域活性化、土地特性、公益性、実現可能性などが求められています。しかし、それぞれどの程度重視されるのかは、現時点では見えにくいところがあります。住民参加、環境保全、交通との接続、雇用創出、財政負担、維持管理費、災害リスクなど、何を優先して判断するのか。ここを明文化してもらうことが大切です。

三つ目は、住民説明と意見聴取の範囲です。説明会に誰が呼ばれ、誰が呼ばれていなかったのかという話は、政治的な対立に見えるか

保全する範囲として整理されていました。つまり、143.5ヘクタールすべてを開発対象として見るのは危険です。実際には、「使える場所」と「守るべき場所」を分けて考える必要があります。

三つ目は、名鉄蒲郡線とどう接続するのかという問いです。名鉄西尾・蒲郡線については、蒲郡線区間を対象に「みなし上下分離方式」による鉄道としての存続方針が示され、運行期間は15年を基本とされています。この土地が西幡豆駅から約1キロという立地にある以上、単に車で訪れる施設ではなく、駅から歩ける、まちとつながる、海やこどもの国や三ヶ根山と回遊できる、といった視点を持てるかどうか重要になります。

この土地の未来を考えることは、山の使い道を考えることにとどまりません。幡豆の交通、観光、自然、暮らし、子どもたちの未来を、どうつなげて考えるかという問いでもあります。

もしも。しかし、本質的にはプロセス設計の問題です。地元町内会、漁協、農業関係者、名鉄沿線の利用者、子育て世代、学校関係者、環境に関心のある人、地域事業者、若者、高齢者など、誰の声をどう集めるのか。ここを丁寧に設計しないと、あとから必ず「聞いていない」「知らなかった」という不満が出ます。

四つ目は、望ましくない用途についての整理です。住民の不安として、太陽光発電施設、産業廃棄物処理施設、外資系企業への売却、大規模工場、外国人労働者の急増などが挙げられています。こうした不安を感情的に煽ることは避けるべきですが、だからといって無視してよいわけでもありません。制度上あり得ること、現実的には難しいこと、県や市として望ましくないと考えていることを分けて整理する必要があります。

五つ目は、維持管理と撤退条件です。大きな施設をつくる場合、建設時の費用だけでなく、その後の管理費、人員、安全管理、老朽化対応が必要になります。人口が減っていく時代には、「つくれるか」だけでなく、「続けられるか」「やめるときに自然や地域へどのような影響が残るか」まで考える必要があります。

### 住民がいま確認したい、5つのこと

旧幡豆地区内陸用地の利活用を考える前提条件

賛成か反対かの前に、まず確認すべきポイントを整理する。

#### 1 募集の位置づけ

これは、何のための募集なのか？

- 事業者公募なのか
- 住民向けの提案募集なのか
- 売却・貸付・連携事業の前段階なのか
- 提案がそのまま採用されるとは限らない

今後の意思決定中での意味を確認する必要がある



#### 2 判断基準

何を重視して決めるのか？

- 地域活性化
- 土地特性
- 公益性
- 実現可能性
- 住民参加・環境保全・交通・雇用・財政負担など

重みづけを明文化してもらうことが大切



#### 3 住民説明と意見聴取

誰の声を、どう集めるのか？

- 町内会・漁協・農業関係者
- 名鉄沿線の利用者
- 子育て世代・学校関係者
- 地域事業者・若者・高齢者

「聞いていない」「知らなかった」を防ぐプロセス設計が必要



#### 4 望ましくない用途の整理

何が不安で、何を切り分けるべきか？

- 太陽光発電施設
- 名鉄廃棄物処理施設
- 外資系企業への売却
- 大規模工場・外国人労働者の急増

制度上あり得ること/難しいこと/望ましくないことを分けて整理する



#### 5 維持管理と撤退条件

つくれた後、続けられるのか？

- 管理費・人員
- 安全管理・老朽化対応
- 続けられるか
- やめるときに何が残るか

人口減少時代は「撤退条件」まで考える必要がある



必要なのは、安心材料ではなく、判断できるだけの情報である。



### 5 アイデアを出すときに大事にしたい7つの条件

#### 1. 全部を開発するのではなく、守る場所と使う場所を分ける

143ヘクタールすべてを何かに使おうと考えると、話が大きくなりすぎます。むしろ、山林として守る場所、自然観察や散策に使う場所、すでに平場になっている場所、将来的に小さく活用できる場所を分けて考える必要があります。

大事なのは、「使うこと」と「守ること」を対立させないことです。使うから壊れるのではなく、関わることで守れる自然もあります。

#### 2. 巨大な箱物より、小さく始めて育てる

人口が減っていく時代に、大きな施設をつくることは慎重であるべきです。施設は建てる時よりも、維持するほうが難しい。最初は話題になっても、10年後、20年後に誰が管理するのかという問題が残ります。

だから、最初から大規模開発を前提にするのではなく、小さな実証実験から始める発想が必要だと思います。たとえば、月に一度の森の開放日、駅から歩く自然観察ルート、親子で参加できる里山整備、学校との連携プログラムなどです。まず試して、続くものを育てる。そういう順番がよいのではないのでしょうか。

#### 3. 名鉄蒲郡線と切り離さない

この土地は、西幡豆駅から北へ約1キロの場所にあります。これはとても大きな意味を持っています。もし車でしか行けない施設をつくるなら、幡豆の未来とは少しずれてしまうかもしれません。せつかく駅から歩ける距離にあるなら、名鉄蒲郡線とつなげて考えるべきです。

電車で来て、駅から歩き、山に入り、海へ抜ける。あるいは、こどもの国や三ヶ根、寺部海岸、東幡豆のまちなかと回遊する。「電車を残す」という言い方だけでは重く聞こえるかもしれませんが、でも、「電車で行ける未来の遊び方をつくる」と考えると、少し景色が変わります。

#### 4. 自然を残すだけでなく、自然に関わる場所にする

幡豆には、すでにたくさんの自然があります。海があり、山があり、干潟があり、島があり、夕日があります。だからこそ、新しく何かをつくるなら、自然を消費する場所ではなく、自然との関わり方を学ぶ場所であってほしいと思います。

森を歩く。水の流れを知る。竹林を整備する。生き物を観察する。木を使う。土に触れる。子どもたちが、ただ遊ぶだけではなく、「この土地に生きているもの」を感じられる場所にする。

看板に描かれていた「自然をたいせつに」という言葉は、ちょっと素朴だけれど、いちばん大事なことを言っているのかもしれない。

#### 5. 地元だけで閉じず、市外や流域から人が通う場所にする

幡豆の未来を考えると、幡豆の人だけで考える必要はありません。西尾市内の人、蒲郡や幸田の人、岡崎や安城の人、豊田や根羽村の人。もっと言えば、三河湾や矢作川流域に暮らす人たちにとっても、この土地は意味を持つかもしれません。

西尾の海は、山や川とつながっています。上流の森が水を育て、その水が川を通り、田畑やまちを通り、海へ届いています。そう考えると、この場所は「幡豆だけの土地」ではなく、森・川・海のつながりを感じる入口にもなり得ます。

#### 6. 住民参加のプロセスを先につくる

何をつくるかより先に、どう決めるかが大事です。説明会を一度開いて終わりではなく、子ども、若者、子育て世代、高齢者、事業者、漁業者、農業者、鉄道利用者、環境に関心のある人など、いろいろな立場の声を聞く必要があります。

特に、これからの地域を長く生きる子どもや若い世代の声は、もっと大切にされてよいと思います。大人が「昔はこうだった」と語るだけでなく、子どもたちが「未来はこうだったらいい」と言える場が必要です。

#### 7. 作った後の維持管理と、やめ方まで考える

公共的な土地活用で忘れられがちなのが、「作った後」のことです。誰が草を刈るのか。誰がトイレを掃除するのか。誰が安全管理をするのか。収入はどこから生まれるのか。利用者が減ったときにどうするのか。撤退するとき、自然をどう戻すのか。

夢のあるアイデアほど、維持管理の現実も一緒に考える必要があります。逆に言えば、そこまで考えられているアイデアは強い。行政にも、地域にも、次の世代にも、ちゃんと届く提案になります。

### 必要なのは、安心材料ではなく、判断できるだけの情報である。

この土地について考えるとき、住民側が求めるべきなのは、単なる安心材料ではありません。必要なのは、判断できるだけの情報です。期待する人も、不安を感じる人も、同じ前提情報をもとに話せる状態をつくること。それが、この大きな土地の未来を考える第一歩だと思います。



## 6 住民がアイデアを出すときのヒント

では、実際に市民がアイデアを出すとしたら、どんなふうに考えればよいのでしょうか。いきなり「施設名」を考えなくてもよいと思います。「キャンプ場」「スポーツ施設」「福祉施設」「カフェ」「公園」といった名前から入ると、どうしても箱物の話になりがちです。

むしろ、最初に考えたいのは、この場所でどんな時間が生まれてほしいかです。子どもが泥だらけになって遊べる時間。高齢者がゆっくり歩ける時間。親子が森の中

で深呼吸できる時間。市外から来た人が、電車を降りて「西尾って面白い」と感じる時間。地元の人が、昔の山の記憶を語れる時間。若い人が、小さな商いを試せる時間。森と海のつながりを、身体で感じる時間。

そう考えると、アイデアの形は少し変わってきます。たとえば、「大きなキャンプ場をつくる」ではなく、「月に数回だけ開く、駅から歩ける森のデイキャンプ実験」かもしれません。「福祉施設をつくる」ではなく、「障害のある人も高齢者も子ども

も、自然の中で過ごせるインクルーシブな散策路」かもしれません。「観光施設をつくる」ではなく、「西幡豆駅から山と海をめぐる、半日回遊ルート」かもしれません。

アイデアは、大きいほどよいわけではありません。むしろ、この土地では「小さく始められること」「自然を壊しすぎないこと」「駅やまちとつながること」「続けられること」が大事になると思います。

## 7. 西尾ミライ新聞として出してみたいアイデア

西尾ミライ新聞としては、この土地を「未来の森の実験場」として考えてみたいです。たとえば、名前をつけるなら、「西幡豆ミライの森」。ここは、巨大なテーマパークではありません。山を大きく削るリゾートでもありません。西幡豆駅から歩いて行ける、森と海とまちをつなぐ小さな実験の場所です。

春には、親子で森を歩く。夏には、木陰で水や生き物について学ぶ。秋には、三ヶ根やこどもの国、海辺の店とつながる回遊イベントを行う。冬には、竹林整備や焚き火、木の仕事を体験する。年に数回、根羽村や矢作川上流の人たちを招き、「西尾の海はどこから来るのか」を考える。

AIを使って、駅からの歩き方や、近くの店、宿泊できる場所、海までのルートを案内することもできます。市民が投稿した「ここが好き」「この道が気持ちいい」「この時間の光がきれい」という情報を集めて、観光パンフレットでは拾えない、生活者目線の地図をつくることもできます。

大切なのは、この土地を「何かを建てる場所」としてだけ見ないことです。ここは、幡豆の未来を考えるための場所になるかもしれません。自然とどう関わるか。電車とどう暮らすか。海と山をどうつなぐか。子どもたちに何を残すか。人口が減る時代に、地域の豊かさをどう測るか。そういう問いを、少しずつ試せる場所になったら面白いと思います。

## 8. あなたも、AIと一緒に考えられる

今回の提案募集は、専門家や企業だけのものではありません。市民もアイデアを出すことができます。でも、いざ考えようとなると、何から書けばよいのかわからない人も多いと思います。そんなときは、AIを使ってみてもよいと思います。

愛知県西尾市西幡豆町にある旧幡豆地区内陸用地143haの活用アイデアを考えたいです。条件は、自然を大きく壊さないこと、名鉄蒲郡線の西幡豆駅からの回遊につながることで、子どもや高齢者も関われること、維持管理が重すぎないことです。住民提案として出せるように、アイデアを3つ考えてください。

この土地を「開発」ではなく「自然と関わる場所」として活用するには、どんな市民参加型のアイデアがありますか。箱物をつくらず、小さく始められる案を考えてください。

AIは、答えを決めてくれるものではありません。でも、自分の考えを整理する壁打ち相手にはなります。ぼんやりした不安や期待を言葉にする手伝いをしてくれます。大事なのは、AIに任せきることではなく、自分の暮らしの実感を入れることです。

「子どもがここで遊べたらいい」「駅から歩ける場所になってほしい」「自然は壊してほしくない」「高齢者も行ける道がほしい」「地元の店にも人が流れてほしい」「大きな施設より、静かに続く場所がいい」。そういう一人ひとりの感覚が、未来の提案になります。

**決める前に、知ろう。つくる前に、問いを立てよう。西幡豆の山の未来を、市民の言葉で考えよう。**

**参照情報** 愛知県「旧幡豆地区内陸用地の土地活用提案の募集について」 / 西尾市「旧幡豆地区内陸用地（西尾市西幡豆町）の土地活用に関する提案を募集」 / 愛知県企業庁「旧幡豆地区内陸用地について」参考資料 / 愛知県「旧幡豆地区内陸用地の土地活用提案書」 / 大村秀章愛知県知事X投稿 / 渡辺正司議員SNS投稿 / 神田たかひろ議員SNS投稿

143ヘクタールという、とても大きな話に聞こえます。けれど、未来はいつも、小さな言葉から始まります。  
決める前に、知ろう。つくる前に、問いを立てよう。西幡豆の山の未来を、市民の言葉で考えよう。